

第2回 藤沢市都市マスタープラン策定協議会 議事要旨

日 時 2025年(令和7年)3月31日(月) 午前14時30分
場 所 藤沢市役所 本庁舎5階 5-1・5-2会議室

1. 開 会

2. 成立宣言

3. 議 事

- (1) 前回策定協議会の振り返り
- (2) 市民等の意見について
- (3) 藤沢市都市マスタープランの改定骨格について

4. その他

5. 閉 会



事務局	【1 開会】 【2 成立宣言】 (会議成立の宣言と傍聴者 1 名の入場許可)
事務局	【3 議事】 (議事 1「前回策定協議会の振り返り」、議事 2「市民等の意見について」を続けて説明)
A 委員	○質疑応答 ・アンケートの回収が 734 件あった中で、全体としての意見のまとめについては承知しましたが、例えば世代によって少し意見が異なるみたいな傾向はありますか。若い世代の子育て世代とシニア世代の間で少し感覚が違うとか、あるいはこの少し年齢層みたいなものの回収数のバランスがこの資料ではわからなかったのもので、その辺を踏まえた傾向を教えていただけないでしょうか。
事務局	→実は年代別の集計を今やっている最中ございまして、そこを明らかにしようと思っております。特に今回 15 歳以上から取ったので高校生たち、大学生たちがどう思っているか、その上の世代、さらに世代という形でだいぶ世代の違いがあるのかなって思うように思いますので、そこは分析していきたいと思います。
A 委員	・サンプルはどんな感じですか。
事務局	→大体均等で、19 歳以下から 70 代以上にカテゴリ分けしていますけども、それでほぼ均等となっています。一番少ないのが 20 代で 71 です。
A 委員	・それでも 71 あるのですね、わかりました。結果をお持ちしております。
B 委員	・20 ページのまとめについてですが、水平軸には、右側に「都市全体の視点」、左側に「身近な地域社会の視点」という区分があり、テーマごとに「どちらか」というと都市全体寄り」または「地域社会寄り」と分類されています。ただ、よく内容を見てみると、実際にはさまざまな空間スケールにまたがるものが多いように思います。 ・例えば、「移動と交通」のテーマでは、「広域的な交通利便性は良いが、地域内にはさまざまな課題がある」という意見が挙がっています。この場合、地域の課題に関する内容であるため、本来は左側（地域社会の視点）に分類されるべき話です。一方で、「暮らし・ライフスタイル」のテーマにおいて、「ウォーキングやスポーツを楽しむ暮らし」が挙げられていますが、例えば河川の活用を考えた場合、それは都市全体の骨格的なインフラに関わる話になるため、右側（都市全体の視点）に書かれてもよい内容だと考えます。 ・また、「安全の確保」に関しても同様で、都市全体としての安全対策という

会長	視点もあれば、地域ごとの防災対策といった視点もあります。こうした点を踏まえると、各テーマを整理する際に、特定のスケールに固定して分類するのではなく、それぞれのテーマには異なるスケールでの検討事項が含まれていることを意識した方がよいのではないかと考えます。一応、その点についてコメントさせていただきました。
	・今回、いろいろな方々に意見を聞いていったわけですが、基本的には皆さんが今感じている課題についてのご意見が中心になっていると思います。全体としては、実はすごく暮らしやすくて良いという評価が多いのですが、マスタープランは「今」だけではなく、10年、20年先を見据えるものです。そうした長期的な視点から、この暮らしやすさが本当に維持できるのかどうかといった意見は、やはり少なくなりがちです。そこはしっかりと、また別の機会に、あるいは我々の中で議論していかなければならないのかなと感じています。 ・何となく全体として「藤沢市は良い街だよね」という評価にとどまってしまうと、それだけではマスタープランとして本当に重要な課題を見失ってしまう可能性があります。市民意見の解釈の仕方として、そこは正直気をつけなければいけないなと感じました。 ・私自身ももともと藤沢市民だったので、この暮らしやすさはよく分かっていますが、本当にこの先、人口が減少していったり、財政的にも厳しくなっていく中で、さまざまな問題が出てくるのではないかと考えています。
C委員	・この資料は非常に多くの意見が集約されていて、わかりやすいと思います。今、会長さんがおっしゃったように、私も藤沢市に住んでいて、非常に暮らしやすい場所だと感じています。ただ、前回の年末の会議でもお話ししたように、これまでの藤沢市の発展を振り返ると、良い点もあれば改善すべき点もあると思います。例えば、私が住んでいる湘南台の地域では、空き店舗が目立つなど、将来に向けて商業的な発展が感じられない部分があります。特に駅周辺の商業施設に関しては、発展が遅れているように思います。 ・そのため、今までのまちづくりにおいて良い部分もたくさんありますが、まだ足りない部分やできていない部分もあります。そういったところをマスタープランで将来に向けて改善していくべきだと思います。もちろん、5年、10年といった長期的な視点も重要ですが、身近なところ、短期的な視点も大事にしていきたいと感じています。
会長	・先ほどのスケールの大小というのがありましたけど、時間のスケールも短いものから長いものまで、それもあるといいかもしれませんね。
事務局	(議事3「都市マスタープランの改定骨格について」を説明)

会長	○質疑応答 ・確認ですが、今日はマスタープランの構成とビジョン編とプラン編についてのご説明がありましたが、今日のプラン編まで議論をして、次回はプロセス編になるという理解で良いですか。つまり今日の内容はここで全部議論しなくてはいけないということでしょうか。
事務局	→今回は大きな考え方しかまだお示しできておりませんので、例えばプラン編につきましても、今回いただいたご意見を踏まえて、この方向で行くのかどうかを検討した結果をお示ししつつ、少しずつ前に進めていきたいと考えております。また、プロセス編も同様に進めていきたいと考えております。
D 委員	・最初の方、4 ページに書いてあることについては、もっともだと思いながら感じましたが、最近よくどこでも使われる言葉に「～らしく」がありますが、ここでも「藤沢らしく」という言葉がありますが、これって多分誰も反対できないんですよね。それぞれの人が思っている「らしさ」というイメージがありますが、この計画の中で言う「藤沢らしさ」とって何なのかというのを、もう少し書き込んだ方がいいのかなという気がしました。「藤沢らしさ」を構成する要素が何かを、未来にわたってちゃんと持続させていくためには、少し「らしさ」を分解していただけたらいいかなと思います。これが1 点目です。 ・次に細かいことですが、防災の専門家として少し防災について語りたい点がありまして、14 ページに関してですが、言葉としては非常にまとまっていて良い感じだと思います。このオレンジ色の部分の「レジリエンスの高さ」についてですが、レジリエンスという言葉は色々な意味で使われることが多いと思いますが、藤沢市の場合はどういう感じのイメージで使われているのでしょうか。例えば私のイメージでは、災害を何らかの形で乗り越えられるということがレジリエンスだと思うのですが、藤沢市においてはどういう意味が込められているのかを少し教えていただきたいと思います。 ・加えて、事前復興まちづくりという点についてですが、これをマスタープランに位置づける場合には、色々な意味を持つかなと思います。どういった意図で事前復興まちづくりを進めていくのか、例えば被災した後に、どんな方針でまちを復興させていくのかということがここに乗るのか、そのあたりが少し気になるので、教えていただければと思います。以上、3 点です。
事務局	→まずレジリエンスのところをご説明いたしますと、その前の方にありました事前復興まちづくりとか、そういった復興の観点の意味合いを都市マスの中により高めていきたいというようなところで、レジリエンスという表現としているところになります。 続いて事前復興のまちづくりであったり、防災都市づくりのところに関しましては、今回都市マスの中で細かくは書かずにまだ方針として示すところに留め、その細かな内容等は、これを布石として、今後の計画作りに入っ

D 委員 会長 B 委員	ていきたいと考えております。以上になります。 「藤沢らしさ」はいろいろ多岐にわたるところがあらうかと思うので、そういったところは整理してお示しできるようにしたいと思っております。 ・ いずれも相当解釈の幅があり得るので、計画としてのやはりメッセージをきちんと出すことが非常に重要だと思うのでぜひお願いします。一見わかりやすい言葉なのですが、もう一度掘り下げてイメージを共有化していくと今後の議論が深まるかなと思います。 ・ まず1つ目の「藤沢らしく持続する」という点についてですが、「藤沢らしさを持続する」というのは少し違うように感じますが、やはりこのまちづくりのやり方とか、何かそういったところにふさわしさがあるんじゃないかという印象を受けました。それを意識されて、そういうふうにかかれたのだと思うのですが、単純に「藤沢らしい」となると、いろんな地域資源とかさまざまな要素が出てきます。ただ、「持続する」という言葉がかかっているもので、少し違和感があるというか、そこに何か意図があるのかもしれませんが。今のところワードだけでは具体的にこういった意図で使われているのかがはっきりしない部分があるので、そこをもう少し深めていければいいのかなという気がしました。 ・ 2点気になる点がございます。まず1点目ですが、レジリエンスのところですが、ここに書かれている内容については、いろいろな意味で使われることが多いですが、日本ではレジリエンスという言葉は、大体自然災害や復興などに使われることが多いと思います。しかし、元々の言葉の意味としては、いろいろな進行性のストレスや突発的なショックに対して、我々人間社会がしなやかに対応して潰れないという部分だと思います。そう考えると、例えば進行性のストレスとしては人口減少や世帯数減少、労働力の減少などがあり、突発的なショックとしては新型コロナウイルスのようなパンデミックや、テロのようなものも考えられます。さらに、進行的な課題として食料不足、食料の自給率や食料セキュリティの問題なども含まれます。このように、自然災害以外のさまざまな問題に対して、我々が適応していく力が備わっていることをレジリエンスと言います。したがって、これを都市マスタープランに位置づける際には、藤沢市のレジリエンスを高めるためには、自然災害に限らず、社会の変化に柔軟に対応していける力を育むような使い方をした方がいいのではないかと思います。 ・ 次に2点目ですが、6ページの黄色・緑・青の分類についてです。こちらについて少し気になる点がありました。一番気になったのは、例えば緑のところに書かれている「学校を作る」や「病院」は、多様な分野の取り組みとも言えるし、これはまちの基盤と言ってもいいのではないかと感じました。特に公共・自治体が責任を持って整備するハード面については、まちの基盤として捉えられるべきだと思います。例えば、病院が適切な場所にあることや、小中学校がしっかりと維持されていることなどは、まちの基盤に含まれ
-----------------------------------	---

会長	ると考えます。 ・一方で、それから、「まちの基盤」の部分に記載されているソフト面の「土地利用」「建物利用」については、町の基盤として捉えることもできますが、一方で、民間の土地利用や建物の建設、あるいはその活用方法については、多様な分野の取り組みの一環である場合もあり、街を舞台としたさまざまな活動に関わることもあります。したがって、ハードとソフトの分類について、若干気になる点があると感じました。 ・さらに、「まちの基盤」というものは、もともと自然物が存在し、そこに私たちが作り上げた人工物が加わる形になっています。例えば、地形や河川、海といった自然的な要素は基本的に変えられないものとして存在し、その上に私たちが整備した道路や公園、建物といった人工物が配置されています。したがって、人工物と自然物を明確に区分することで、今後の持続可能性を考える上でも、より分かりやすくなるのではないかと考えます。 ・具体的な改善案ではなく申し訳ありませんが、この「レジリエンス」に関しては、他の委員の皆さんのご意見も伺いながら、調整していく必要があるのではないかと思います。 ・レジリエンスの使い方というか、それがもっと広い概念だということと、あと今の3つの層についてですが、今回の構成が基本になってはいるものの、確かに言われてみると本当にこうかなというところもあります。イメージとしては、「多様な分野の取組」というのは、行政の中での都市計画や都市基盤以外の取り組みを指しているのでしょうか。また、一番上の「様々な活動」というのは、行政だけでなく、市民活動や民間の取り組みも含まれるわけですから、この「多様な分野の取組」と「様々な活動」の2つは実際どのように分けるのでしょうか。
事務局	→イメージとしては、一番下の青のレイヤーは、これまで従来の都市マスタープランに基づいて行われてきた部分を示しており、今後さらに強化していくべき部分が主に緑と黄色のレイヤーに示されています。ただ、おっしゃる通り、必ずしもハードとソフトが明確に分けられているわけではなく、青と緑、または緑と黄色の部分に関しても、表現方法に若干の違いが見られる点はお指摘いただいた通りです。この部分については、現状ではこのように表現されています。 緑のレイヤーにおける「多様な分野の取り組み」については、都市政策以外の分野を指しており、これには行政の分野との連携に加え、民間、例えば保育や交通事業者なども含まれます。また、上の層については、これらを基にして、市民活動など、さまざまな活動を行う方々が関与する部分を想定しています。
会長	・同じ活動でも、異なる角度から見るができると思います。例えば、まちを作るための様々な活動も、いろいろな分野に分類できると思うのですが、その場合、緑色のカテゴリーに当てはまるのでしょうか。ちょっとよくわからない部分があります。

事務局	→そこがまだ綺麗には分けられていません。都市マスタープランでもそこまで対象にしたい、視野に入りたいというのを見せたいので、この3層まであるところはありますが、一方で先ほどご説明させていただいた中でも、いろんな分野にハード、ソフトというものがあることをきちんと強調するために、少し雑に今回示してしまっているところがあります。 実は多様な分野のところと様々な活動というところの境目がどこにあるのかもまだ明確にはできていないのですが、ざっくり今捉えている中で、真ん中の緑の基礎部分は「サービス」という言葉が伝わりやすいのかなと思っています。元々いろんなサービスが市内にはもちろんありますが、それをうまく都市空間で使っていただき、もっと積極的に、都市基盤としてまちを使っていただくことを繋げていければいいかなと考えています。その上で、そのサービスの中でも活動があり、まちの中でいろいろな皆さんが活動するということも含めて、一番上の層は様々な活動ということで、まちづくりに限定せずというところを含めて、こういった場を創出していきたいというところを見せ方として現在示しているところです。
会長	・ここは野心的なポイントなので、今まであまりマスタープランでこういうことを見たことないような気がしますので、多分これからまさに議論すると思います。
A 委員	・今のB委員からのご指摘に関するやり取りの中で、1つのポイントとして「ケア」というキーワードが欠けていると感じています。全体としては非常に前向きで、確かに活動が活発であり、それをバックアップするような計画にはなっていますが、一方で人口減少や縮退といった課題は避けて通れず、何年か先には必ず直面することになります。その前提に立つと、「ケア」をどのように、できるだけ自分たちの生活圏の中で構築するかが重要になると思います。 ・その観点で言うと、先ほどから話に出ている5ページの緑色のレイヤー、つまり学校や病院、福祉、子育て、保育、教育といった施設のあり方について、それぞれは個別計画、例えば地域福祉計画や学校教育計画などで議論されていると思いますが、マスタープランとしては、それらとのリンクを張りながら、適材適所の統廃合や再編を進める必要があります。全国的にも幼稚園や保育園の統廃合が進む可能性があり、それを考えたときに「単に閉じるのか」「統合するのか」「価値転換として空き家を活用し、分散させるのか」など、多様な視点が求められます。 ・また、公園や子育て支援のアウトリーチの展開を考えた場合、公園の利用のあり方や、顔合わせの場としての活用についても検討が必要です。こうした点は、おそらく福祉や教育の個別計画だけでは語れない部分であり、むしろ都市計画の視点から考えるべきことではないかと思います。そのため、都市マスタープランの中でそれらを視野に入れつつ、個別計画との連携を図り、具体的な実現へと結びつけていくことが求められます。

会長	・このような背景から、「ケア」というキーワードを全体のビジョンとして位置づけることが重要ではないでしょうか。ビジョン編の骨格の部分にも、この視点を意識した表現を盛り込む必要がありますし、緑色のレイヤーの整理も見直すべきかもしれません。さらに、プラン編においても、生活圏の中での「ケア」や「共助」、そしてレジリエンスと絡めた視点を強化し、これらの文脈を全体としてもう少し明確に示す必要があると感じました。その点をぜひ、今後の検討に盛り込んでいただければと思います。 ・今のお話、「ケア」という言葉をもう少し説明した方が良いと思いました。例えば先ほどサービスということで緑色のところを言いましたけど、例えばそのサービスに対してケアという考え方というのは、共助って話もありましたけども、大体ケアっていうのはどういう概念なのかを全員で共有したいです。
A 委員	・いわゆる公共サービスはケアに近い部分かもしれませんが、今は民間にも委ねるということと、支援を受ける前の自助的な、自分ごとのウェルビーングみたいな言い方をしますけど、そういうものももう少しケアという概念に含めていく必要があるのではないかと思います。例えば、自分自身の健康であったり、生活の質に関わることについて、意識を向けるような場や取り組みが必要になってきています。それが就労支援の形になったり、効率的な福祉の提供につながったり、子ども食堂のような形で展開されたり、高齢者の居場所づくりに結びついていくのですが、施策としては、例えば「あそこにセンターがあるからいいよね」「介護福祉施設が整備されているからいいよね」といったように、どちらかというハード面の整備を中心とした話になりがちです。 ・しかし、サービスや公共サービスよりも手前の段階で、自発的にそういう場を支えていくような活動が小規模ながら各地で起こっていて、それを認め、支えていかないと、自助・共助の形での持続的な仕組みが作られないという現状があります。今の計画では、その「小さな場づくり」がまだ十分に盛り込まれていないように思います。 ・これはおそらく、個別計画の方でも必ずしも明確に示されていない可能性があって、藤沢市の地域福祉計画をまだ詳しく確認できていないのですが、現在の状況を見ても、そうした小さな場づくりが求められていることは明らかです。それこそ、空き家を活用したり、公園を新しい形で使ったりする動きがすでに出てきています。そうした取り組みは、むしろ都市インフラや都市計画マスタープランの中で扱うべきテーマとも言えます。場を作っていくという視点を、都市計画の中でしっかりと位置づけることが重要ではないかと考えています。
会長	・少し理解が深まってきましたが、いかがでしょうか。さらに言うと、この「自立するネットワーク」としての自立という概念を、もっと豊かに捉える場でもあるのかなと思いました。ただ、今お話を聞いてそう感じただけなのですが、大丈夫でしょうか。もし事務局としてのレスポンスが必要であれば、議

事務局	論がさらに盛り上がりそうですが、大丈夫でしょうか。よろしくお願いします。 →ケアという視点について、これまであまり意識できていなかった部分もあるかもしれませんが、ここで改めて考えたいと思います。行政的な立場で言いますと、それぞれの分野、例えば福祉や教育などには、それぞれしっかりとした計画があり、我々がそれを直接どうこうするという話ではありません。ただし、そうした様々な施策に対して、我々は都市基盤を中心に考えていますが、この土地をこう活用することで、より便利になり、市民の皆さんにとって使いやすくなる、そういった視点から関わっていくことができるのではないかと考えています。行政的には、そのように動いている施策とつながる形でアプローチするという視点がある一方で、より身近なまちづくりの観点からも、さまざまな意見が出てくるかと思います。まだ十分に整理しきれていない部分もありますが、そういった視点も踏まえながら、今後さらに検討を進めていきたいと思っています。よろしくお願いします。
A 委員	・地域福祉計画の方では、おそらく「こういう場所が必要です」という方針は示されていると思いますが、それが「どこに必要か」までは書き込めないんですね。そこで、逆に都市計画の方では「このエリアなら使えるよ」と示すというか、例えばこのエリアには空き家が多かったり、公園や緑も多かったりするので、そういった場所を活用することで居場所づくりにつなげられる、といった方向性を示せるのではないかと思います。 ・地域福祉計画では概念的に「居場所づくりを進めましょう」といった書き方になると思いますが、都市計画の方で「この場所を活用すれば、より実現に近づく」と具体的に示すことで、行政の個別計画、例えば子どもの計画などとも連動しやすくなると思います。そういった連携をフリーにしておかないと、福祉の分野では「こういう場が必要だからつくりましょう」と計画されても、実際には立地が偏ってしまい、「人がなかなか来てくれない」「バスがないからどうするのか」といった課題が出てしまうことがよくあります。 ・これはまちづくりの全体ビジョンとも連動する話なので、そういった視点を計画に盛り込んでいただいた方がいいというのが私の見解です。
E 委員	・今、交通の話が出ましたが、私も先ほどからその点について話したいと思っていました。最初の方で、自転車が通りにくいとか、歩きにくいとか、藤沢の道が狭いといった話がありましたよね。また、目的地にどうやって行くのかという問題についても触れられていたと思うのですが、こういった視点が今回の構成の中ではどこに位置づけられるのかが気になっています。 ・それから、もう1点、話が少し前に戻りますが、私もプレスト会議に参加させていただいていたので、14 ページのピンクの部分についてお伝えしたいことがあります。そこに書かれている意見は、「できるといいな」という前

事務局	向きな視点から出された話もあったと思うのですが、それが「できている。」という形で表現されているのには、少し違和感を覚えました。 →広域交通などに関しましては、資料の14ページの「連携と挑戦のまちづくり」の部分で、従来の広域的なネットワークなどについて触れる予定です。 また、今おっしゃっていただいたような身近な地域の道路に関しては、「住みよさを育むまちづくり」の中で記載できればと考えています。
会長	・項目としては、あまり明確に示されていないように感じました。「住みよさを育むまちづくり」を前提としているわりには、「移動」という観点があまり含まれていないように思います。例えば、高齢化が進む中で、高齢者の移動手段の確保は非常に重要な課題ですが、広域的な話とは別に、身近な生活圏での移動のあり方についての記述があまり見当たらないように思いました。この論点は、「身近な生活利便性のあり方」という部分に含まれているという理解でよろしいでしょうか。
事務局	→変化に対応した暮らしやすさや人口の動態に応じた取り組みが重要だと思います。いずれにしても、最も重要な項目は、生活圏内、つまり身近な居住圏域での暮らしやすさや過ごしやすさをしっかりと盛り込んでいくことだと思います。これに関しては、1つ前にお示した6番の「連携と挑戦のまちづくり」に記載があるように、身近な暮らしを支える仕組みや新技術が青い枠内に入ってくるかと思っています。 新しい技術を取り入れながら、住みやすさや暮らしやすさを実現するためには、例えば自動運転や自動バスといった技術が活躍する可能性もありますので、そのような観点をこちらに記載できればと考えています。
C委員	・14ページの右側にある「脱炭素で潤うまちづくり」という表現に、少し違和感を覚えました。「脱炭素で潤う」というのは、一体どの時点での話なのか。もちろん、市民やその地域に住む人々の視点に基づいたものだと思いますが、実際のところどうなのでしょう。 ・ご存じのように、光合成には炭素が必要です。炭素がどんどん減少すれば、酸素の供給にも影響が出ます。例えば、海の漁獲量が減少している要因の1つとして、こうした「脱炭素」の取り組みが関係しているのではないかと考えることもできます。炭素があることでプランクトンが生育し、それが生態系の基盤を支えているからです。 ・また、私の住む地域でも、雑木林がすべて伐採され、その跡地にソーラーパネルが設置されるという状況が見られます。こうした光景を見ると、それが本当に「緑豊かな環境」につながるのか疑問に思います。「脱炭素」という言葉がシンボリックに使われていますが、実際にそれが「潤う」ことにつながるのか、むしろ相反する要素があるのではないかと感じています。
事務局	→炭素に関する取り組みには大きく2つの概念があると思います。ひとつは、炭素量を減らす取り組みとしての断熱や省エネなどがあり、もうひとつは、炭素を吸収して酸素を作り出すという形で、植物を活用した生物多様性の

C 委員	取り組みです。脱炭素の話では、この2つの概念が重要な要素となります。さらに、現在は生物多様性の取り組みが大きなテーマとなっており、特に緑を増やす取り組みが重要視されています。現在、緑が減少している状況に対して、これから緑を増やすことによって、緑が潤い、身近に感じることで私たちの心も潤うというニュアンスを込めて、このような表現を使っています。しかし、もし違和感を持つ部分があれば、その点も踏まえて改めて検討していければと思います。
事務局	・ 藤沢市は緑が豊かな方だなと思います。またページ中央「各方針の主な追加・強化の視点」のうち「しなやかな強さを持つ都市づくり」の項目で延焼リスクの備えというのがあり、鵜沼地区あたりになるのかなと思いますが、どうしても最近、ロサンゼルス山火事というのが印象的ですが、そういうものがこの文章からちょっとイメージにしまうのですが、どのようにお考えなのでしょうか。当然ここはポイントとして書かれてるだけなのでしょうけども。 →延焼リスクの備えというところは、おっしゃるようにやはり木造の家屋が比較的多く広がっていて、また都市計画道路や公開空地が少ないため、常に延焼の危険性がある地域を想定しているということになります。そういったエリアに対して、今後どのように備えるか、どのように取り組んでいくかが重要な課題となっています。さまざまな手法が考えられている中で、これを実際にどう解決していくかを真剣に取り組んでいかなければならないという観点から、この項目を記載したというわけです。
C 委員	・ いろいろ市民の意見やさまざまな視点が反映されている中で、それが実現できることを願っております。ぜひ、そのポイントをただ情報として受け取るだけでなく、実際に一歩でも進められるように頑張ってくださいと思います。よろしくお願いします。
F 委員	・ 10 ページのビジョンについて、意見というか、質問に近いものになってしまうのですが、一番大きなビジョンとして「自立するネットワーク都市」を掲げていて、新しい改定計画でも「自立するネットワーク都市」を全体ビジョンとして掲げています。先ほど一瞬「自立」という言葉が出てきたのですが、私の中で「自立」というのが何を指しているのか、あまりよく理解できていません。 ・ 現行計画では、比較的ハード面寄りの話が多く、この土地自体が自立して持続していくという話がかかれていたので、その点は理解できるのですが、新しい計画では、人やソフト面にも注目していくという話になっています。その中で、「自立」という言葉が使われており、例えば、「自分ごととして捉えられるまちづくり」「自立した活動」「持続可能な活動」といった3つの項目が挙げられています。しかし、この内容を見ると、市民に対して「自立してください」と求めているように感じてしまいます。

事務局	・もちろん、アクティブな人であれば、場があれば活動しよう、自立できる場があるなら活用しようとするかもしれませんが、そういう人たちはばかりではないと思っています。まちづくりにおいては、強要するのではなく、支える側の人々がいて、住民の生活を支える役割も大きいはずです。その中で、「自立する」とか「自立させる」といったニュアンスがどういう意味を持つのか、もう少し整理して考えた方がよいのではないかと感じました。 →一見してそのように見えてしまったということは、やはり表現の仕方について、誰が見ても誤解を生まないように工夫する必要があるのではないかと、ご指摘を受けて改めて思いました。 こちらで意図していた趣旨としては、ご指摘のとおり、「皆がアクティブになってまちづくりをしよう」と求めるものではなく、市として「自立するまちづくり」「持続可能なまちづくり」を進めていく中で、今後の人口減少や財政の厳しさを踏まえ、より多くの人々の活動をまちづくりに取り入れていきたいという考えがあります。 これまでも、まちづくり団体の方々がそれぞれ自立して活動されている場面は多くありますが、一方で担い手が減少し、次の世代へと継承することが課題となっているという声も聞いています。そうした、まちを支えてくださっている活動団体の方々が、持続可能な形で活動を続けたり、後継者へと引き継いだりできるよう、市としても支えていきたいという思いがあります。また、そうした活動をする方々が増えることで、まちづくり全体の活力にもつながっていくと考えています。「市民全員でまちづくりをしよう」といった趣旨ではありませんが、こうした担い手を増やし、まちの活力を維持・向上させていきたいということです。
F 委員	・最近のまちづくりでは、民間や市民と連携しながら進めていく事例が増えていますし、市だけでは支えきれない部分を公民館や市民と一緒に補いながら進めていくことは、今後ますます重要になると考えています。 ・そうした意味では、「自立」よりむしろ「持続可能」や「ネットワーク」といった考え方に含まれるような、「連携」や「支え合い」といった要素がより強調されると、私のような一般市民にもより分かりやすく伝わるのではないかと思います。
会長	・確かにこれは一番大事な将来都市像の表現なのですが、本当に変えなくていいのかという点では、「自立」という意味が確かに豊かになっている反面、少しわかりにくくなっているように思います。 ・そう考えると、やはりこの表現を変更することはできないのでしょうか。すごく基本的な部分ですが、変えることに対して少し躊躇されているようにも感じるのですが、それはやはり総合計画に入っているからなのでしょう。
事務局	→当初策定からずっとこのまま来ているんですけど、実際「これだけ聞くと何を言っているのかわからない」と言われてはいるんですけど、一方で、この時代の変遷を半世紀過ぎている中で、色褪せずに残ってきたというところも

会長	あって、やはり今の言葉を変えてしまうと5年後にはだんだん使えなくなるという中で、その時々 meaning を見出せるという良さもあるのかなというところで用いていたんですけど、ちょっとここはこれから何回か議論させていただければと思います。 ・新しく変えることはないにしても、本当にこれが実際の中でしっかりとこの言葉が根付いているのであれば、それでもいいのかもしれません。ただしやはりここは今回の改定でもまさに一番大事な部分かもしれませんね。中心となる場所だと思います。
G 委員	・もう一度説明をお願いしたいのですが、14 ページの「新たな都市づくりの基本方針」のところで、「13 地区という捉え方をせずに横断的な考え方に基づいて」という形で説明があったかと思います。そうすると、「13 地区別まちづくり」という言葉自体がもう消えていくという理解でよろしいのでしょうか。もしそうであれば、これまでの藤沢市の歴史、特に住民自治の位置付けとして、「13 地区ごとのまちづくり」はかなり浸透しているのではないかと思います。実際、「郷土づくり推進会議」からの意見もいただいているとのことですが、この会議自体が 13 地区に分かれている住民自治の会議体でもあります。私のイメージとしては、「6つの都市拠点」と「13 地区のまちづくり」が市民の皆さんに根付いている中で、その「13 地区のまちづくり」を横断的に進めるべき点があるのは理解できます。ただ、それによって市民の皆さんが「自分たちのまちづくりにどのように意見を出し、参画できるのか」が分かりにくくなってしまうのではないかと、印象を受けました。15 ページの説明とうまく整理できていない部分があるので、「13 地区にとらわれず」という部分について、もう一度説明をお願いしますでしょうか。
事務局	→13 地区別のまちづくりというのがこれまで全体構想の中で大きな方針として効果を上げてきたというところに対して、今回それを改めるというところになります。それと別に、地区別構想というものが都市マスタープランの中であり、今現状では冊子の中で半分以上のページを示しているものが、地区別構想で、そちらは 13 地区ごとに構成されているものになっています。そのため、13 地区別の地区別構想をなくするというわけではありません。今まで 13 地区という枠組みでまちづくりを進めてきた方針に対して、今後はより「質の高さ」や「きめ細やかさ」が重視されるという点です。例えば、大きな都市計画道路や公園などはすでになんかなり整備が進んできた部分があるため、そういったものは全体として捉え、13 地区ごとの記載から外し、よりその地域に特化した内容に記載できるようにするという考えです。ですので、13 地区別まちづくりから「住みよさを育むまちづくり」への移行は、13 地区というものの自体をなくすという意味ではなく、解像度を上げて地域ごとにきめ細やかな視点を持って進めていくという趣旨です。地区別に関しては後段で整理する形で進めていく予定です。

G 委員	・ ということであれば、やはり「13 地区」という表現がなくなってしまって良いのかという点について、少し疑問に感じています。これはあくまで私の感想ですが、住民の皆さんにとっては、例えば藤沢地区など、自分たちが住んでいる地区の認識が非常に高い中で進められてきたことから、「13 地区」という言葉が抜けてしまうことが、住民の方々にとってわかりにくくなるのではないかと思います。
H 委員	・ 先ほど議論があった「自立性」という点についてですが、骨格は変える必要はないのかなと思いつつも、1986 年の第 4 次首都圏整備計画で具体的に「自立性」という言葉が出てきて以来、第 5 次計画まで続いてきましたが、首都圏全体から見た都市の自立性が謳われていた時代とは少し変わってきているように感じます。そのため、同じタイトルを使っても、説明文は大きく変わるべきだと思いますが、やはりその中身が変わっているというメッセージはしっかりと出すべきだと思います。 ・ 次に、14 ページのレジリエンスに関する点ですが、B 委員がおっしゃったように、レジリエンスの範囲を災害だけにとどまらず、もう少し広い視点で捉えるべきだと思います。特にインフラに関しては、八潮の下水道の事故のように、予期せぬ問題で日常生活が困難になることがあり、災害以外でもそういった事例が発生しています。藤沢市がこれまで整備してきたインフラの「ケア」という観点をこれからしっかりと盛り込む必要があると感じます。八潮の例のように急に壊れたり陥没したりして、お風呂の水が流せなくなるなどして住みやすさが急に下がるのが今後も起こり得るため、インフラの維持やケアを重視したレジリエンスが必要だと思います。 ・ そのため、7 ページにある「まちの基盤を磨き続ける」という表現についてですが、この表現には 2 つの意味が含まれていると考えています。1 つは、基盤の「磨き」つまり、既存のインフラを改善し、人々が利用しやすくすること、例えば自動車中心の道路空間を人々が使いやすい空間に変える、河川敷を緑豊かな公園として活用するということです。もう 1 つは、基盤を「ケア」し、維持していくことです。どちらの意味も重要であり、その視点を明確に盛り込むべきだと思います。 ・ また、行政が持っている基盤を活用し、利活用できるようにすることで、市民がどのような活動を展開できるのかという視点を含めるとともに、基盤を維持するためのケアの視点も加えるべきだと感じました。さらに、まちづくりを進める手順や手法について、行政の視点では「作る」ことが重要である一方で、活用や育成という視点も重要です。「作る」だけでなく、作ったものを「育てる」ための手法もプロセスに組み込むことが重要だと思います。 ・ 一番関心があるのは「美しさに満ちた都市づくり」ですが、地域資源を活かした地域まちづくりという視点も重要だと感じています。ただ、「活かす」
会長	

事務局	というだけではなく、「守る」という視点も大切だと思います。藤沢市でも、市民の意見の中で高層マンションの話がありましたが、元々は鵜沼などにあったお屋敷や広い土地が高層マンションに変わり、風致地区内の松林もほとんどなくなってきています。藤沢市にあったものがどんどん失われていくことに対して、守るための制度が必要だと思います。新しい時代に合わせて駅前のような場所を変えていかなければならない部分もありますが、藤沢市の歴史や記憶をしっかり継承しなければ、どのまちでも見られるような駅前になってしまうのではないかと懸念しています。そういう意味で、藤沢市が築いてきた記憶や文化を守ることは、変化の時代だからこそっと意識すべきことだと考えています。 ・また、「地域資源を活かす」というだけではなく、活かさないものを無視するのではなく、それを守るための考慮も必要だと思います。さらに、「美しさ」というのは、単に外見や目に見えるものだけではなく、人々の感性に訴える街づくりを指すと私は考えています。単なる機能的な面ではなく、楽しさや時には寂しさを感じさせてくれるような場所、つまり豊かさがある街づくりが重要です。それこそが藤沢市が築いてきた歴史に根差したものであり、今の藤沢市を形作っていると思います。美しさについては見た目だけでなく、身近なレベルで親しみや温かさを感じるような街づくりが必要だと感じています。 ・今日の議論の中では、「自立」やサービスに対する「ケア」の話が出ましたし、マスタープランの哲学という内容もありましたので、これからも繰り返し議論し、少しずつ進めていく形で、今日の意見を踏まえてブラッシュアップしていただければと思います。 【4 その他】 ・次回会議は2025年（令和7年）6月3日（火）午前10時を予定、場所は本庁舎6階の6-1会議室 【5 閉会】 以 上
-----	---